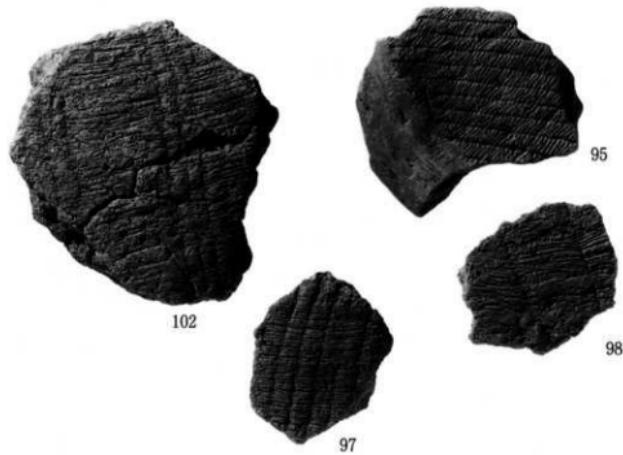
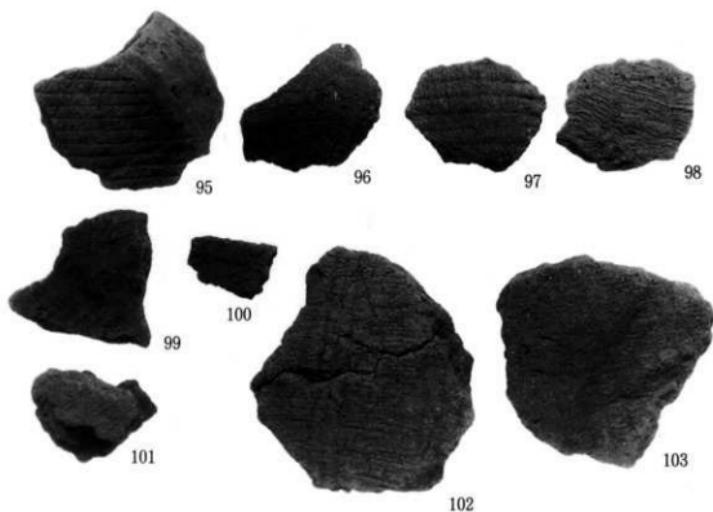


図版27





105



104



105



104



30



31



114



129



125



134



275



276



285



277



284



280



278



282



119



115



114



116



117



122



121



124



127



126



128



131



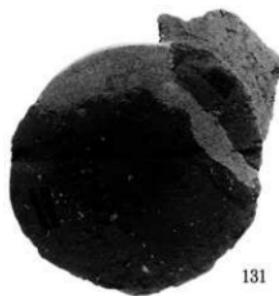
132



133



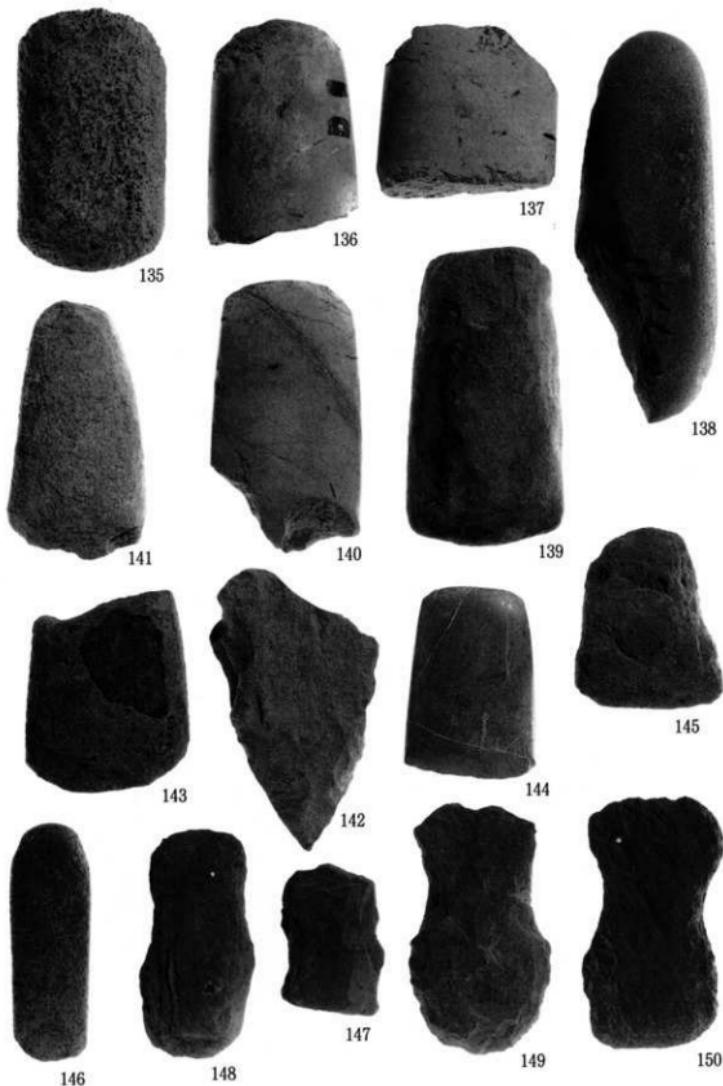
133

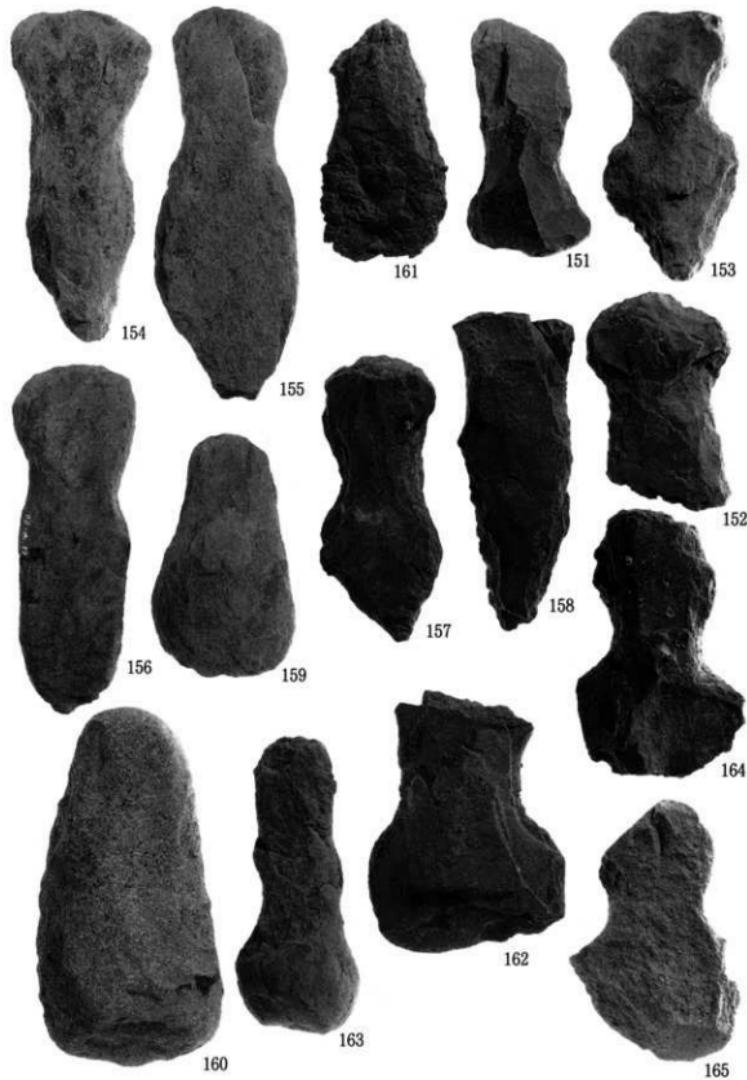


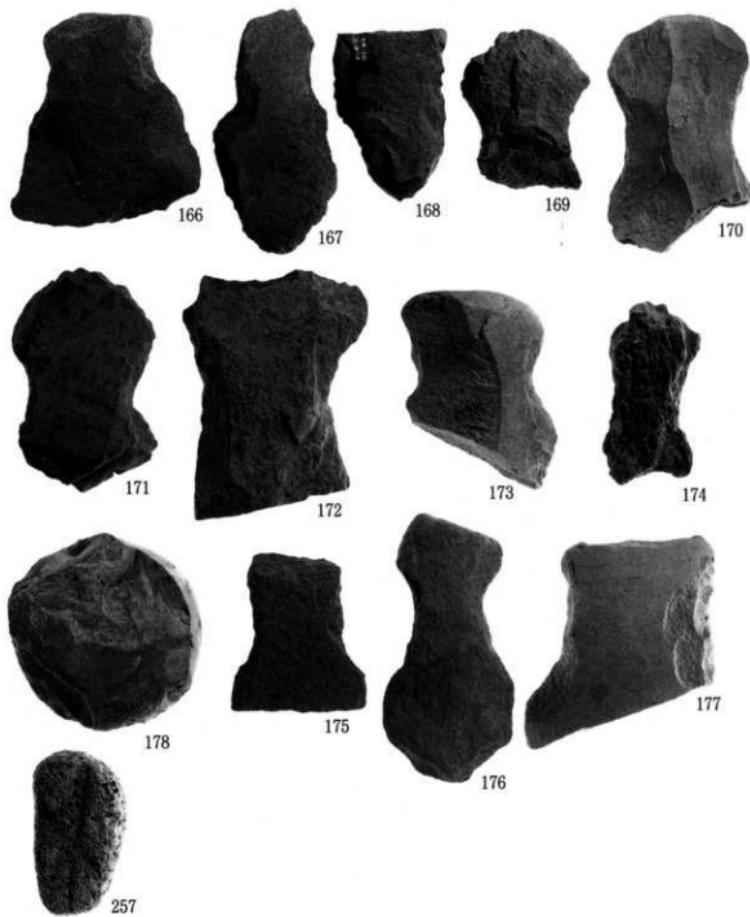
131

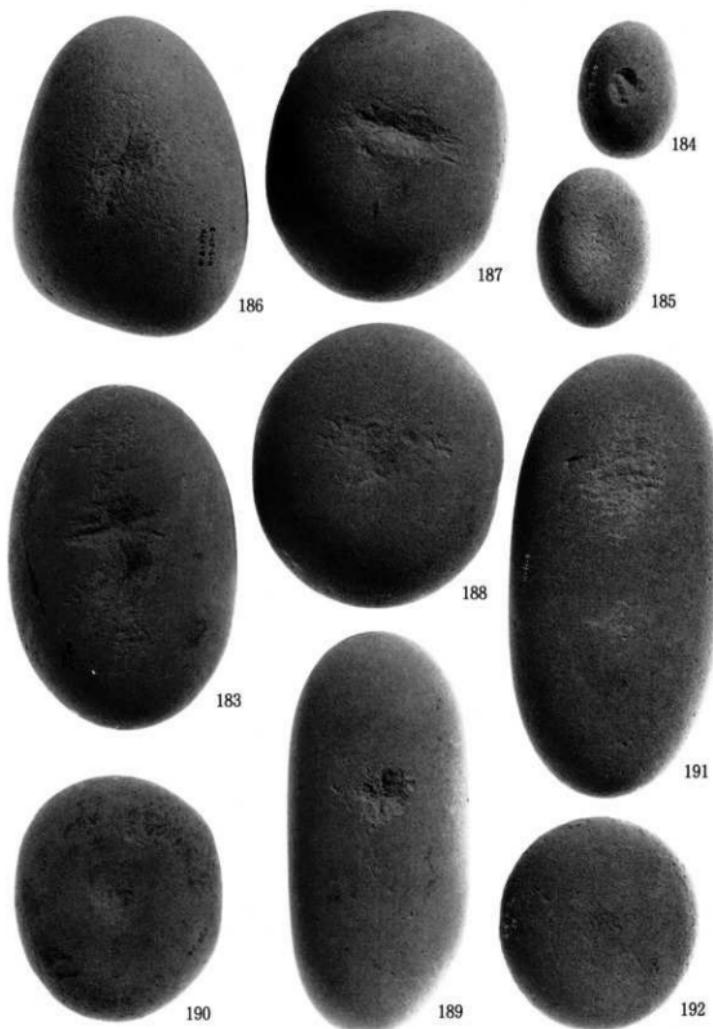


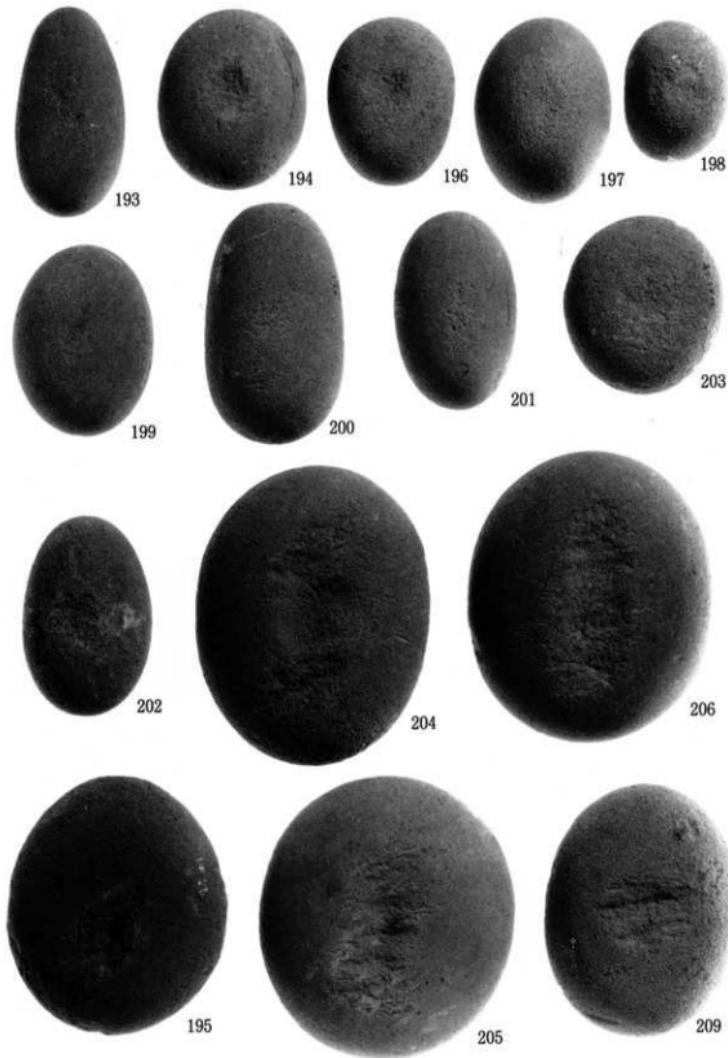
132

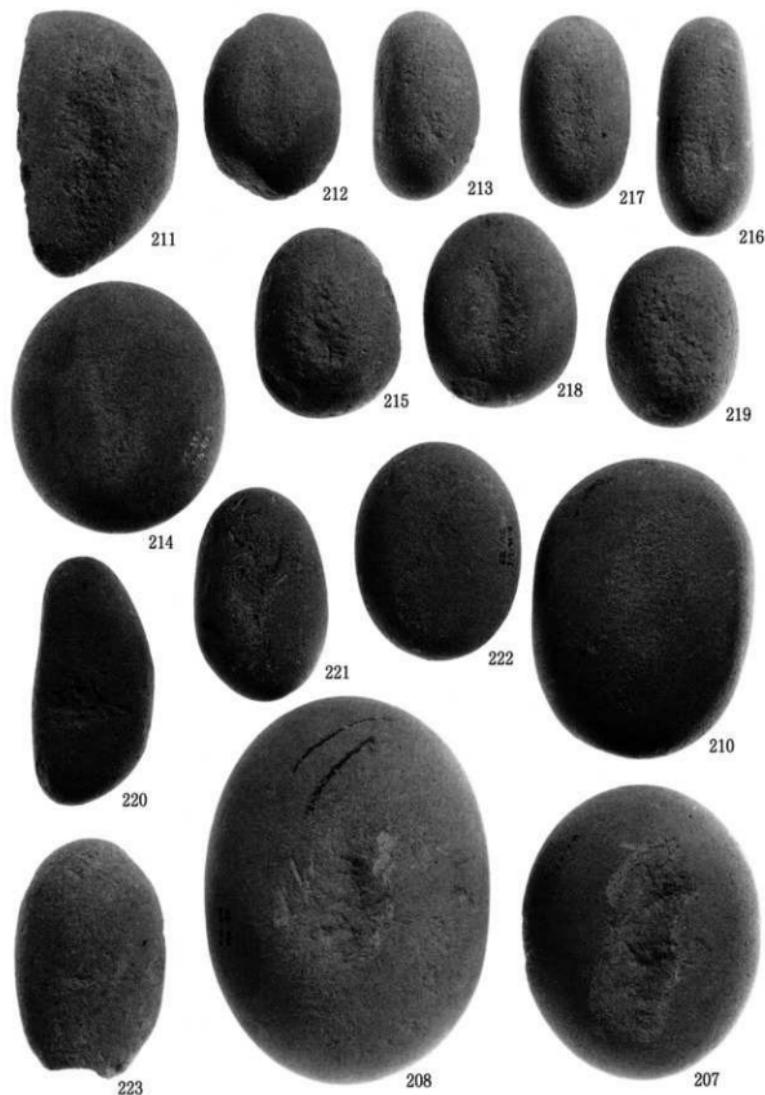


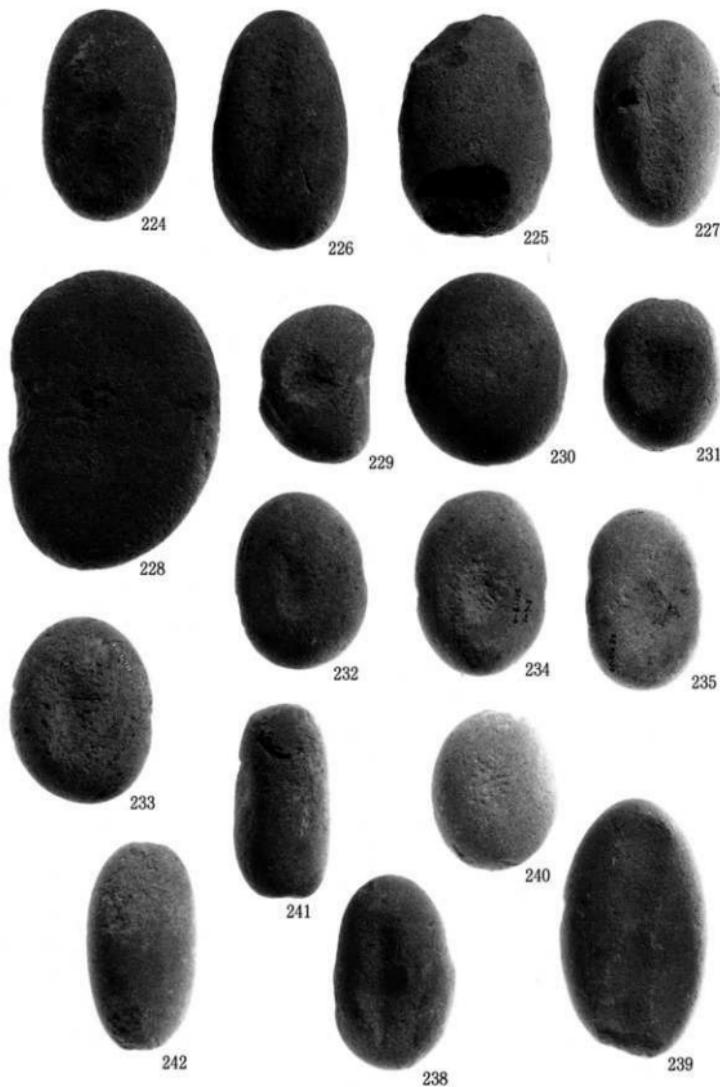


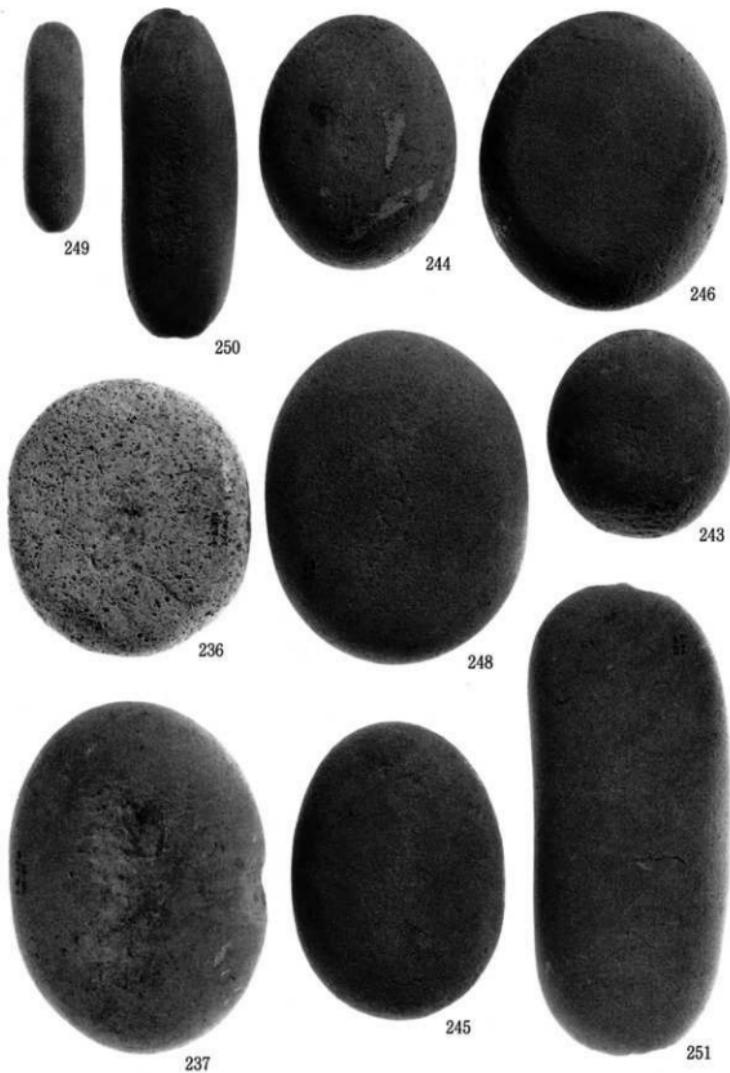














252



253



254

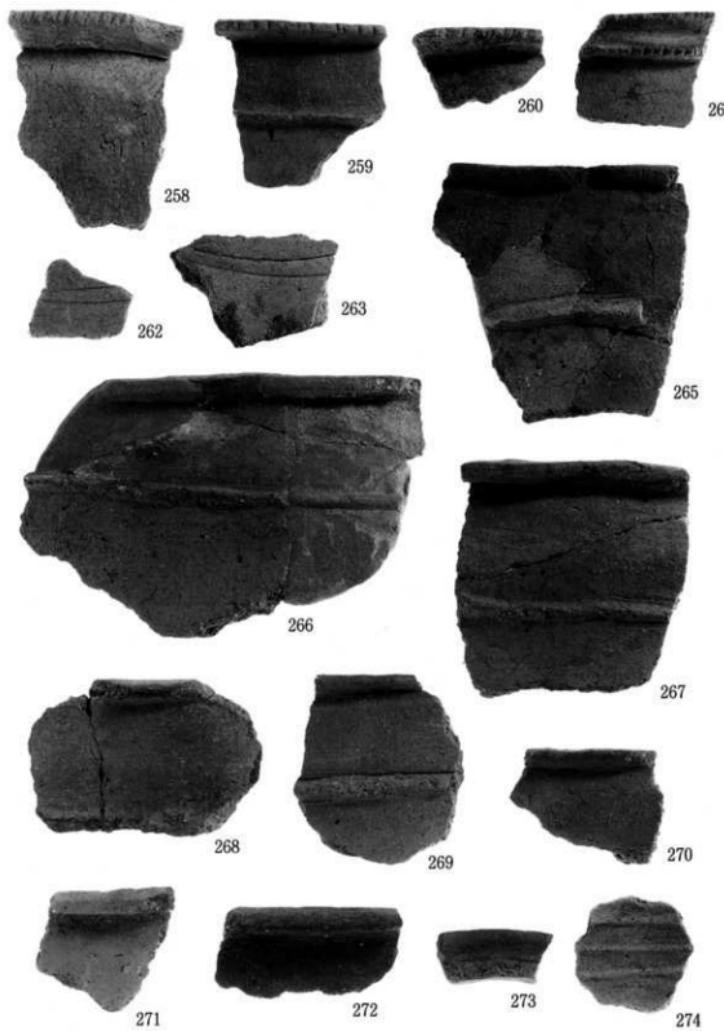


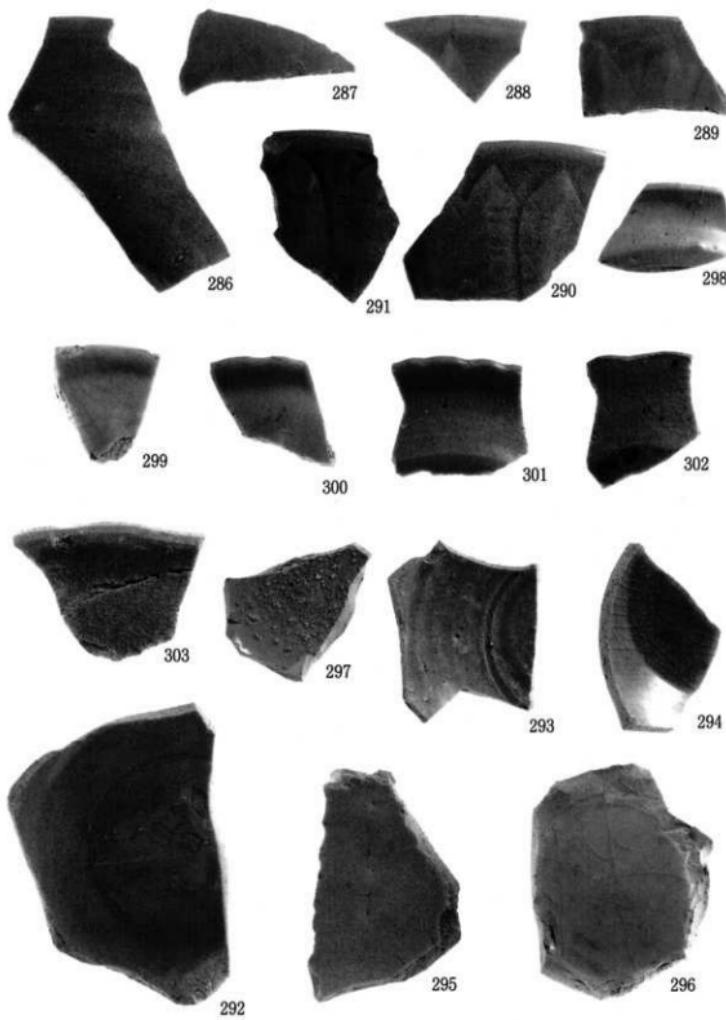
255

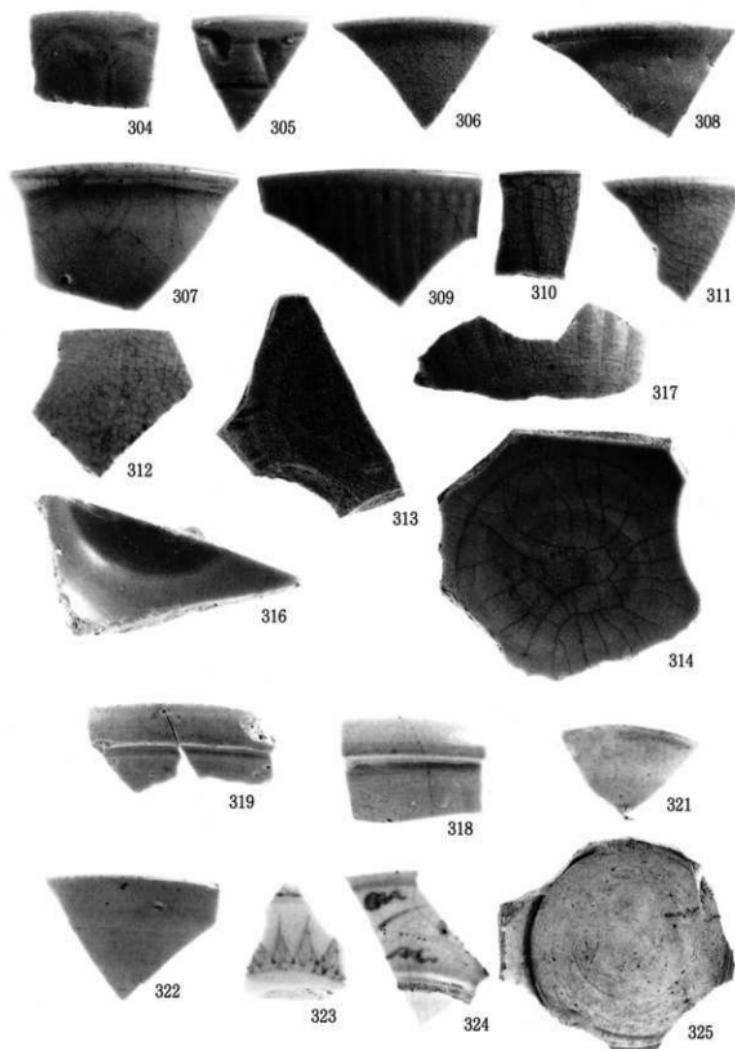


256

図版41

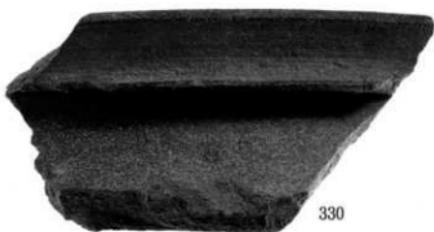








326



330



328



327

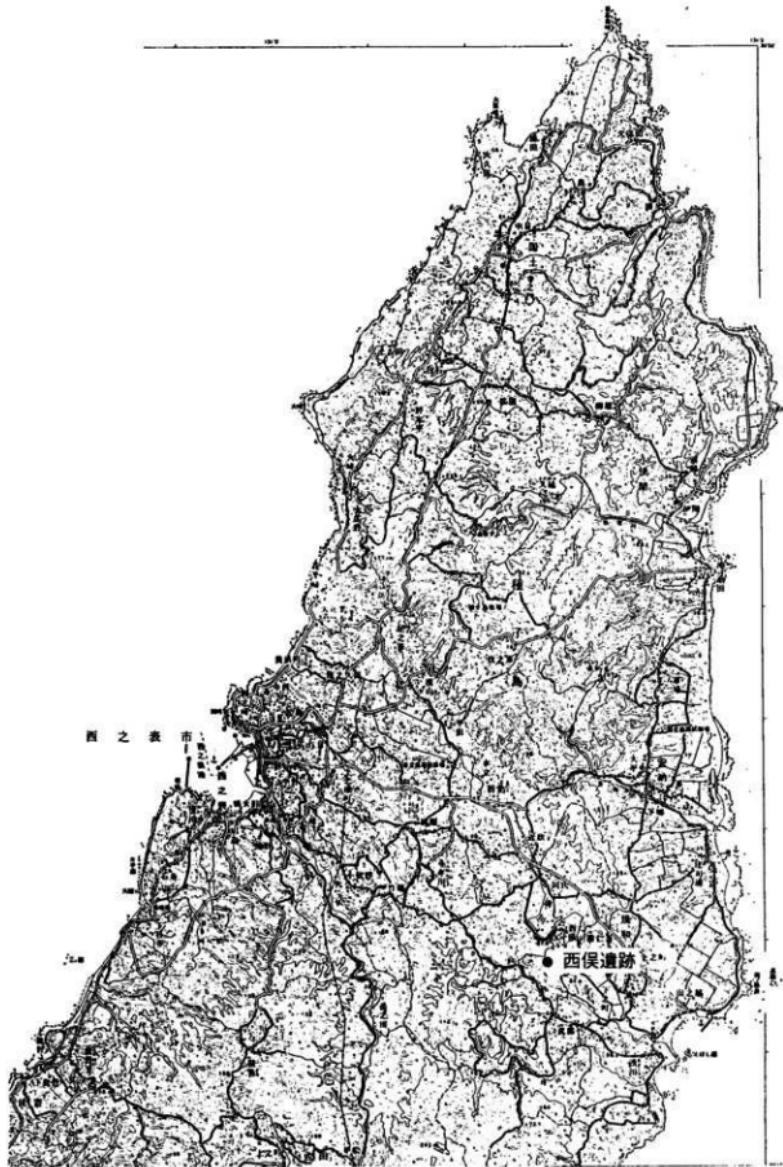


331

「西 侯 遺 跡」

報告書抄録

ふりがな	にしまな							
書名	西俣遺跡							
副書名	県営畠地帯総合土地改良事業(西俣地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(24)							
シリーズ番号	()							
編著者名	青崎和憲							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-5652 鹿児島県姶良郡姶良町平松 TEL 0995-65-8787							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西俣遺跡	鹿児島県西之表市 現和西俣 鹿児島県 西之表市現和西俣	西之表市		130° 41' 80"	131° 2' 80"		200m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西俣遺跡		縄文時代 (早期)	無し	土器 縄文早期				



第1図 西俣遺跡位置図

例　　言

- 1 本報告書は、昭和54年度に発掘調査した西之表西俣地区の農地整備事業に伴う「西俣遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡番号は遺跡ごとに通し番号を付し、本文及び挿図・図版の番号は一致する。
- 3 「西俣遺跡」の整理、遺物の実測図、製図、写真撮影、編集執筆については青崎が行った。なお整理については県立埋蔵文化センター作業員の協力を得た。

目 次

西 俣 遺 跡	118
第Ⅰ章 調査の経過	123
第1節 調査に至るまでの経過	123
第2節 調査組織	123
第3節 調査の経過	
第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境	124
第Ⅲ章 遺跡及び調査の概要	127
第1節 層 位	127
第2節 繩文時代	128
1 遺 物	128
(1) 土 器	128
まとめ	133

挿 図 目 次

第1図 西俣遺跡位置図	120	第5図 土器実測図	130
第2図 周辺遺跡	125	第6図 土器実測図	131
第3図 西俣遺跡周辺地形図	126	第7図 土器実測図	132
第4図 出土遺物分布状況	129		

表 目 次

表1 遺跡地各表	124
----------	-----

図 版 目 次

図版1 西俣遺跡全景・調査風景	134	図版5 土器出土状況	138
図版2 土層・遺物出土状況	135	図版6 土器出土状況	139
図版3 遺物出土状況	136		
図版4 遺物出土状況	137		

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部（以下、農政整備課）は、大園遺跡発掘調査の期間中に西之表市現和西保地区において県営畠地総合土地改良工事を計画を発表し、事業に先立って県教育委員会文化課（以下、文化課）に当該地における埋蔵文化財の有無について照会した。事業対象地区は、かつて平安時代末の猿投窯産の長頸壺が出土したことからその取り扱いについて県農地整備課及び西之表市教育委員会と協議した結果、昭和53年8月の中種子町大園遺跡発掘調査後、引き続き発掘調査を実施することとした。

調査対象地区については、猿投壺出土したと想定される地点を中心に、試掘溝を18ヶ所を設定し、古代の包含層や、下層の遺物包含層の確認を行ったが、一部を除き大半が耕作等によって包物包含層は削平されて存在していなかった。遺構等は発見されなかった。しかし、整備事業の工事が進行中の調査対象地外（C地点）から縄文早期の遺物が数点が露呈して発見されたことから、その取り扱いについて再度協議した結果、継続して発掘調査を実施することになった。なお、B地点については設計変更して現地保存を図ることになった。調査は昭和54年3月5日～3月7日にかけて文化課が発掘調査を実施した。

第2節 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	国 分 正 明（当時）
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課 長	谷 崎 哲 夫（当時）
企画調整	タ	主 幹	本 蔵 久 三（当時）
調査者	タ	主 事	青 崎 和 憲（当時）
		主 事	中 村 耕 治（当時）

発掘調査に当たっては、鹿児島県熊毛支庁土地改良課及び熊毛教育事務所、西之表市土木課、同町教育委員会、作業員として発掘調査に従事された地元の方々の協力を得た。

日誌抄

- 3／5 大園遺跡発掘調査開始にあたって、熊毛支庁土地改良課、中種子町土木課と打ち合わせ。
遺跡発掘調査区、2m×4mのグリッド18ヶ所を設定し、確認調査を実施した。調査の結果、A地点には遺物遺構は発見されなかった。B地点については縄文早期の遺物が出土し現地保存を図った。なお、調査対象地外に縄文早期の土器片数点を発見し、その取り扱いについて熊毛支庁、西之表市教委と協議し、工事中発見による発掘調査で対応することになった。
- 3／6 C地点の調査開始。アカホヤ層以上は工事による削平のため除去され、縄文早期の遺物包含層は残存していた。遺物包含層の掘り下げ作業。
- 3／7 約100点の土器片が出土した。遺構は発見されなかった。遺物出土状況写真撮影及び平板測量、遺物取り上げ。調査終了した。

第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境

西俣遺跡（西之表市）の存在する種子島は、大隅半島の最南端にある佐多岬より約54kmの東南方にある。

種子島は、西之表市・中種子町・南種子町の1市2町からなるが、標高282.3mが最高所である平坦な島である。種子島は古くより考古学の調査が行われており、縄文時代の千草原遺跡、納曾遺跡、下剥峯遺跡、弥生時代の広田遺跡、鳥ノ峯遺跡、上熊野貝塚等全国的にも知られている遺跡が数多い。また、近年では、3万年以上も以前の旧石器時代の遺跡である南種子町横峯C遺跡や、旧石器時代から定住を彷彿とさせる中種子町立切遺跡、縄文時代草創期の石棺がまとめて出土した園田遺跡等が相次いで調査され、ロケット基地があり宇宙へ近い島において、本県でも最も古い遺跡が発見されて全国の考古学関係者の注目を浴びている。

西之表市は、種子島の北部を占め3方を海に囲まれ、南は中種子町と隣接している。地勢は、標高200mの中央部より3方の海岸部へとなだらかに降っている。遺跡も山麓部から海岸部へかけて数多く発見、調査されており、縄文時代草創期の奥ノ仁田遺跡、早期の下剥峯遺跡・赤木遺跡・奥風遺跡・前期の指辺遺跡・本城遺跡・後期の浅川牧遺跡・田ノ脇遺跡・納曾遺跡等が知られている。特に平成8年に西之表市教育委員会で発掘調査が行われた奥ノ仁田遺跡では、夥しい量の縄文時代草創期の土器が出土し、種子島も南九州と同様の縄文時代草創期の文化が存在していたことを裏付けることとなった。また、平成6年に調査された日守遺跡では、縄文時代早期の遺物が出土している。

表1

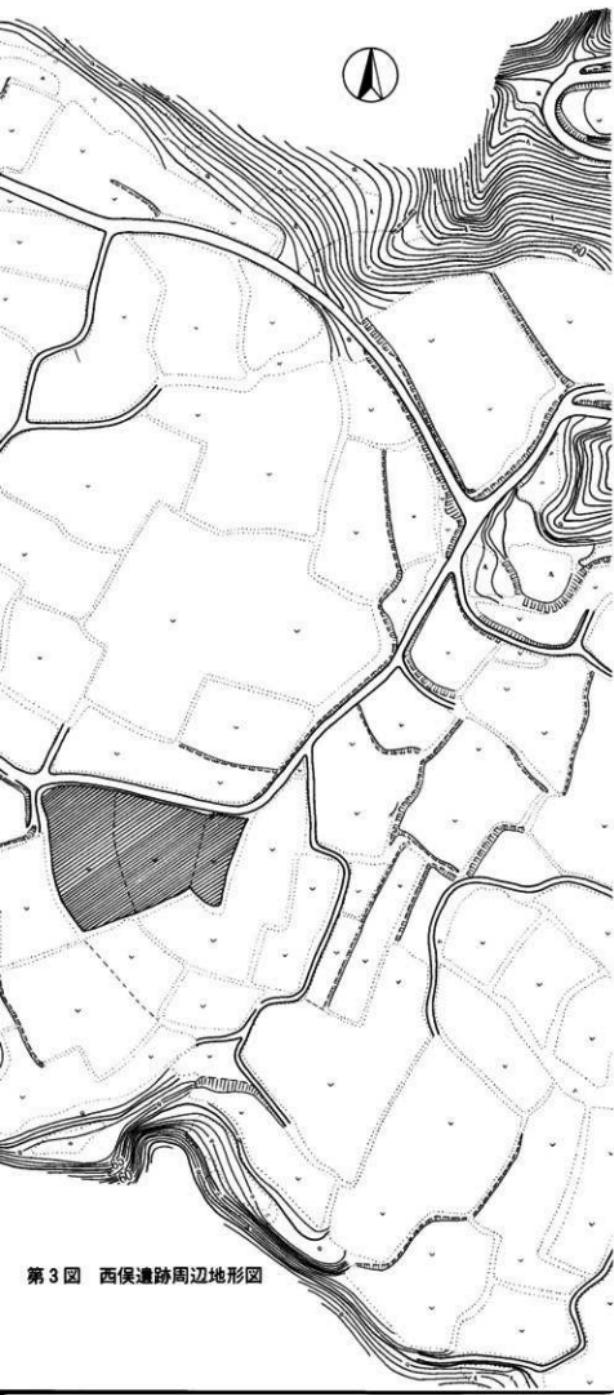
番号	遺跡名	所在地	地形	時期	遺物等
1	日守A	安城日守	台地	縄文早期	土器片
2	日守B	安城日守	台地	縄文早期	土器片
3	日守C	安城日守	台地	縄文早期	土器片
4	奥ノ仁田	安城奥ノ仁田	台地	縄文創期・早期	隆蒂文土器・石斧・石皿・すり石
5	奥嵐	安城奥嵐	台地	縄文早期・後期	苦浜式・市来式
6	赤木	現和庄司ヶ浦	台地	縄文早期	塞ノ神式
7	下剥峯	現和庄司ヶ浦	台地	縄文早場～弥生中期	吉田式・石坂式・轟式・山口式・磨製石器
8	大四郎	現和庄司ヶ浦	台地	縄文前期	曾煙式
9	内和	現和庄司ヶ浦	台地	歴史時代	土師器・須恵器
10	指辺	現和庄司ヶ浦	台地	縄文前期	曾煙式・すり石・凹石
11	東方ノ平	現和庄司ヶ浦	台地	縄文前期	
12	田ノ脇	現和田ノ脇	砂丘	弥生後期	埋葬遺跡・貝輪
13	泉原	現和田ノ脇	台地	縄文～弥生	扶状耳飾り・磨製石斧
14	道月ノ峯	現和		中世	土師器・須恵器
15	武部	現和式部	台地	縄文後期	
16	本立	本立	平地	縄文前期～中世	石斧・紡錘事
17	横峰	現和庄司ヶ浦	台地	弥生時代	円形周溝墓
18	浅川牧	現和浅川	台地	縄文後期	住居跡・市来式



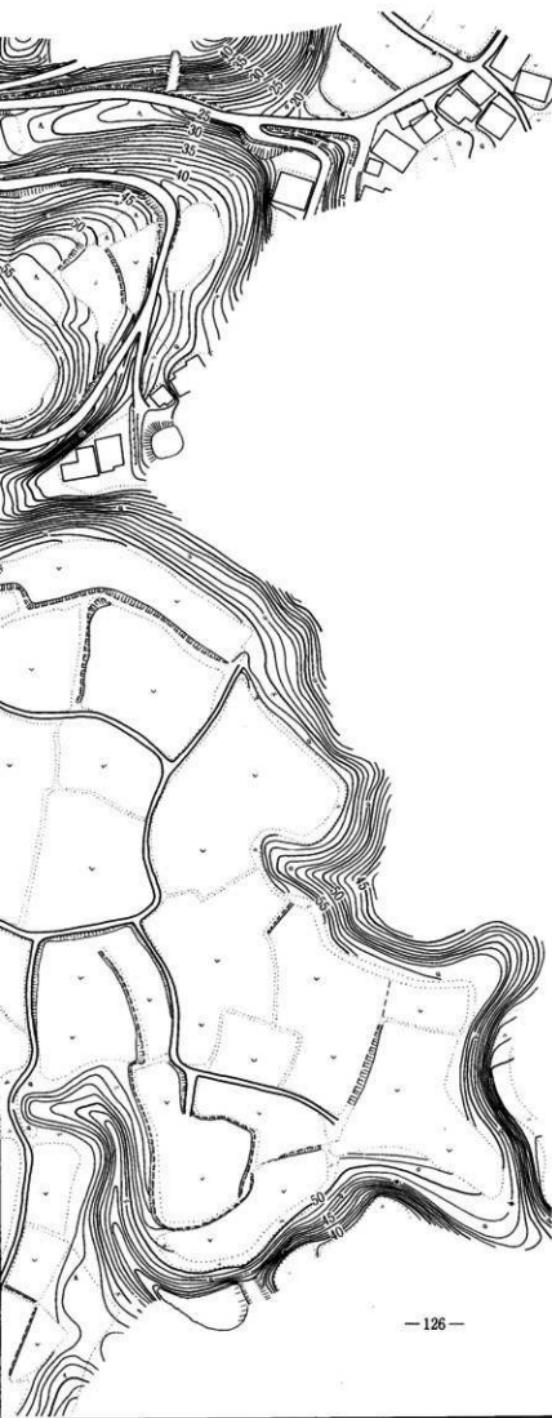
第2図 周辺遺跡



0 100 m



第3図 西ノ京遺跡周辺地形図



第三章 遺跡及び調査の概要

調査対象地区については、猿投壺出土したと想定される地点を中心に、試掘溝を18ヶ所を設定し、古代の包含層や、下層の遺物包含層の確認を行ったが、一部分を除き遺物・遺構等は発見されなかつた。しかし、整備事業の工事が進行中の調査対象地外（C 地点）から縄文早期の遺物が数点が露呈して発見されたことから、その取り扱いについて再度協議した結果、継続して発掘調査を実施することとなった。なお、B 地点については設計変更して現地保存を図ることになった。調査は昭和54年3月5日～3月7日にかけて文化課が発掘調査を実施した。

第1節 層位

西俣遺跡の遺物包含層は、表土下層は乳白色粘土層となり耕作等によってかなりの部分で削平されていた。

周辺の烟断面の路筋した層から想定すると以下の状況であった。

I層 現表土層（耕作）	種子島の地場産業であるサトウキビ畑、落花生畑となっている。
II層 黒色土層	黒色火山灰土層である。耕作によって大部分は削平されている。
III層 黄色土層	通称アカホヤ火山灰で、上部は火山灰の二次堆積層で、下部は粒子の細かい火碎流からなる。
IV層 乳白色粘土層	縄文時代早期の遺物包含層である。
V層 明乳褐色粘土層	無遺物層である。
VI層 明黄褐色土	無遺物層である。

第2節 繩文時代

1 遺物

(1) 土器

調査の結果、縄文時代草創期及び早期の土器が発見された。

I類土器（第5図）

1は縦3cm、横4cmの土器片である。体部に幅1.2cm、厚さ4mmの貼り付け突帯を波状1条がみられる。さらに突帯には貝殻腹縁による押圧文を施文する。器壁は薄く、色調は明褐色で焼成は施い。縄文草創期の隆帯文土器である。

II類土器（第5図）

II類土器は縄文早期の貝殻円筒土器である。口縁部の形態により3類に分類した。

IIA類土器（第5図2～5）

口縁部は直行し、口唇部内側に稜を有すタイプの土器である。

2は口唇部の外側端部から内側へ棒状施文具による刻目を施し小さな波状となる。口縁部には縦列に、貝殻腹縁による刺突文を丁寧に施文する。なお、この文様帶の部位はわずかに肥厚する。

3は口唇部に小さな波状に刻目文を施し、口縁部は貝殻腹縁を縦位に押し引きし、さらに、貝殻腹縁刺突線文を3本巡らすものである。

4は口唇部には比較的太めの刻目文を施し、口縁部には貝殻腹縁による横位の刺突線文をさらに3本に巡らす。

5は復元口径22.3cmの円筒土器である。口縁部内側は、横位に弱いヘラ調整が施されている。内側口唇部は稜を有し口唇部外側端部から内側に押圧による刻目文を施し小さな波状を呈す。口縁部には一見山形押文形と見間違う、貝殻腹縁を施文具とする押し引きで、4条の山形文を巡らしている。2と同様に口縁部の文様帶は胴部の器壁の厚さよりやや肥厚する。

IIIB類土器（第5図6～7）

口唇部内側端部が、わずかに内湾して舌状を呈すタイプである。

6、7は口縁部は直行し、口唇部内側はわずかに内湾して舌状を呈し、口唇部は平坦となる。外側口唇部には棒状施文具による刻目文を施し、口縁部には貝殻腹縁による刺突を縦位に施文し、さらに下位は1状の貝殻刺突線文を巡らせたものである。比較的器壁が厚い。

IIIC類土器（第5図8～9）

口縁部は直行し、口唇部が平坦となるタイプである。

8、9は直行する口縁部で口唇部は平坦となる。両者とも口唇部外側に棒状施文具による浅い刻目文を施し、また8には2と同様な貝殻腹縁を、縦位に丁寧な刺突文を施している。9は口唇部外側に棒状施文具による押圧キザミを施す。

II類胴部（第6図）

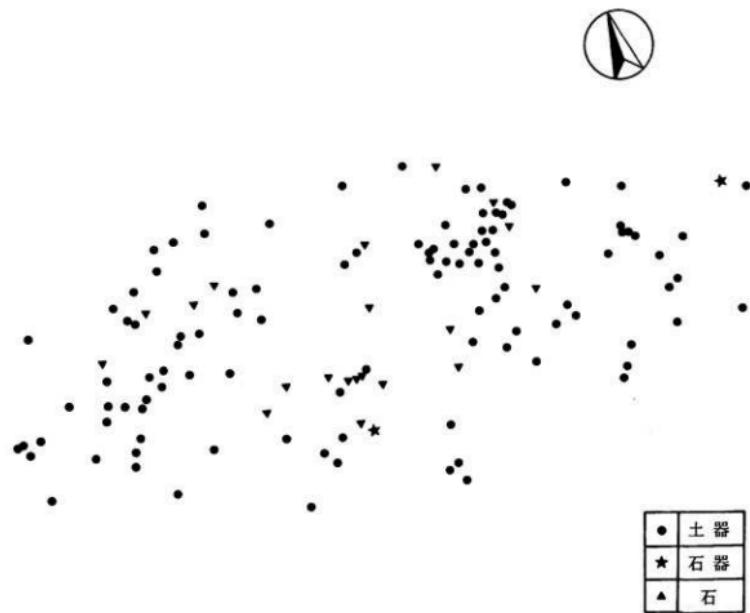
10～13は円筒土器の胴部である。胴部の復元径は約23cm～24cmである。外面には器面調整の貝殻腹縁による条痕文、内面はナデ及び弱い範調整が施されている。

II類底部（第7図）

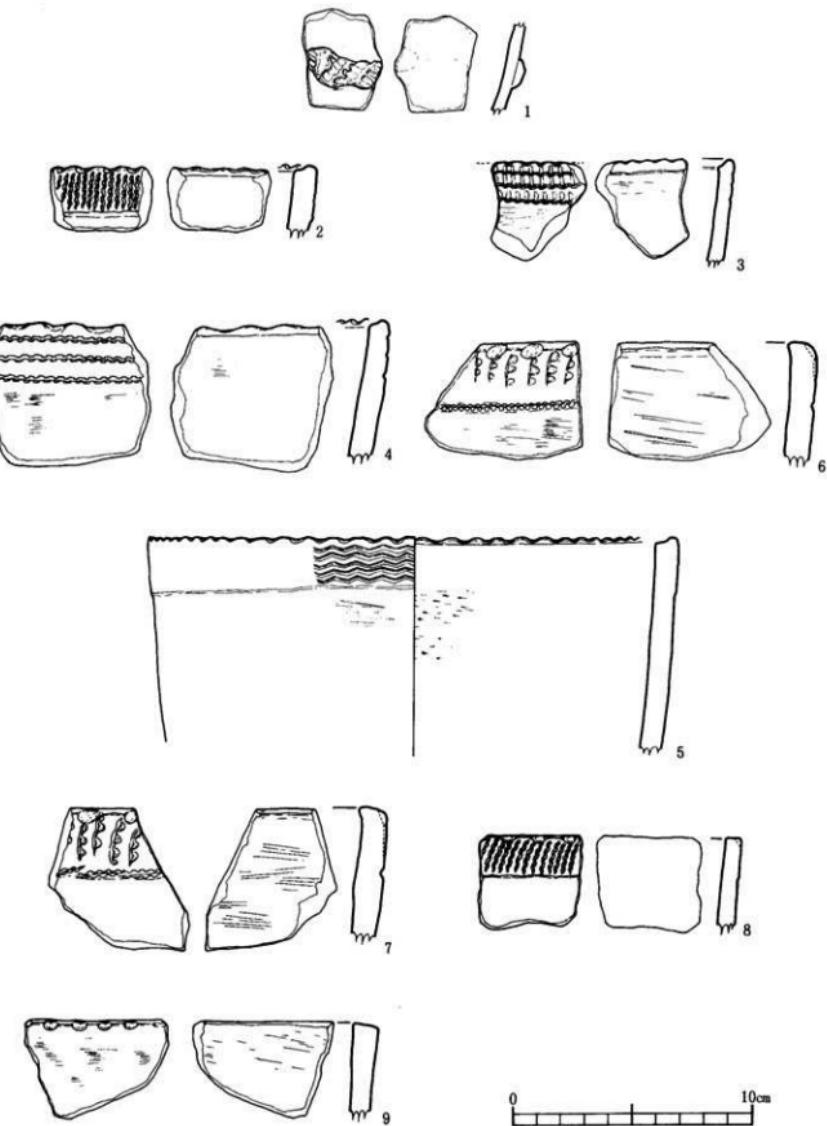
14、15は底部である。14は復元径14.5cmである。なお、外底部には網代圧痕が観察される。網代底は一般的には縄文後期に普遍的に見られるが、この時期まで遡ることが判明した最初の発見である。

III類土器（第7図）

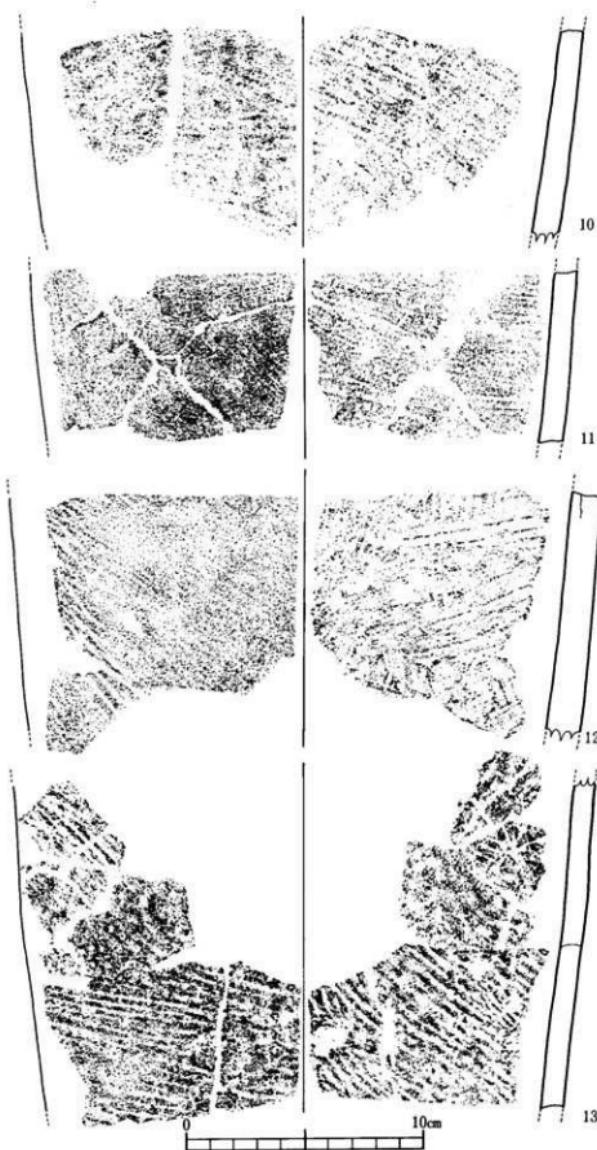
16は口縁部は直行し、口唇部は平坦となる。口縁部には貝殻腹縁による横位の重線文とその下位には、弧状の重線文を施文する。口縁部上位に約1cmの円形の補修孔が穿かれている。形式は不明であるが、縄文早期の土器と思われる。色調は灰褐色を呈し、胎土は脆い。



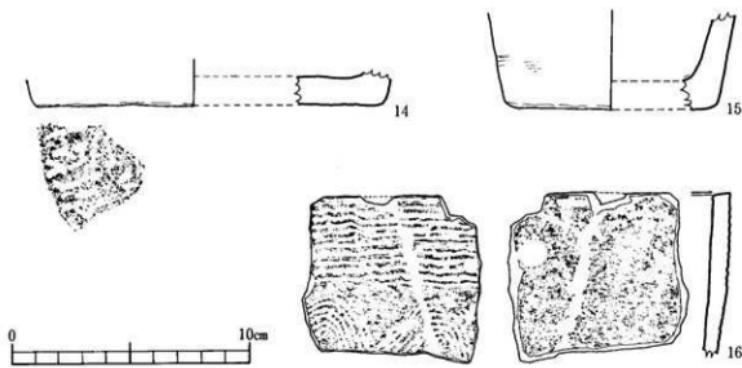
第4図 出土遺物分布状況



第5図 土器実測図



第6図 土器実測図



第7図 土器実測図

まとめ

今日の南九州における後期旧石器時代、縄文草創期・早期遺跡の発見と調査成果は目覚ましいものがある。その中でも特に、大隅諸島に位置する種子島における種子IV火山灰の下層から約31,000年前の土坑や砾群、焼土を伴う南種子町横峰C遺跡、中種子町立切遺跡や平成5年度に発掘調査された縄文草創期の隆帯文土器が出土した西之表市奥ノ仁田遺跡は、最終氷河期から急激に温暖化が始まる日本列島の後期旧石器や縄文草創期の位置づけや様相など今後の評価とともに課題を提供している。

本遺跡のI類土器は、縄文草創期の隆帯文土器の小片の1点のみである。胎土には砂粒子を含み、色調は明褐色を呈する。文様は隆帯に貝殻腹縁による刺突を施していることから、奥ノ仁田遺跡出土の8b類に相当する。その他、種子島における草創期の出土遺跡には、西之表市屋久川遺跡、二本松遺跡の報告や、中種子町三角山遺跡があげられる。

II類土器は、縄文早期前葉前平式土器である。口縁部は直行し、底部は平底の円筒土器である。口唇部の形態からII類を3つに細分した。口唇部内側に稜を有し、口縁端部に刻目文を施し波状を呈すII類A、口唇部はわずかにない湾して舌状を呈し、口唇部外側に刻目文を施すII類B、口唇部が平坦で、口唇部外側に刻目文を施すII類Cがある。9を除き、口縁部の文様帶部位の幅が広く、また、2、3、5のように文様帶が胸部器壁よりわずかに肥厚していることがあげられる。また、5は押し引きの山形文が施され今までに例のないものである。一般的な縄文早期前葉に位置づけされている前平式土器については、最古の前平式土器は岩本タイプの円筒土器で、口唇部と口縁部に主として貝殻・へら状施文具により連続圧痕文、連続刺突文を施したもので、その結果、口縁部が凸凹をなすものも知られ、口唇部内側に稜を有するものも認められ、口唇部は平坦をなすもの、舌状の断面形を持つものなどがある。器面は貝殻腹縁による丁寧な条痕仕上げが行われる（長野1994）とし、これとII類土器を比較すると、岩本タイプとの共通性及び類似点が見られ、従って本遺跡のII類土器も古い段階の前平式に比定されよう。

これまで種子島においては、これに後続する吉田式土器は西之表市下剥峰遺跡や安城川脇、中種子町野間での出土例があるが、前平式土器は始めての発見例で、前平式土器分布の南限が明らかになり、草創期との繋がりを知る手がかりとなった。



(上) 西侯遺跡全景

(下) 調査風景



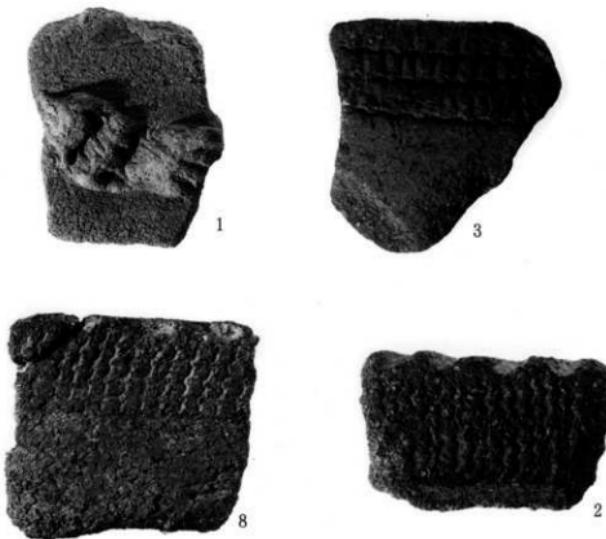
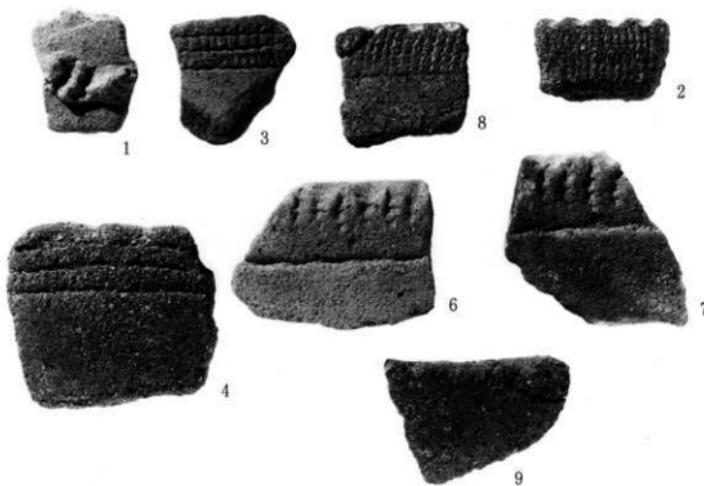


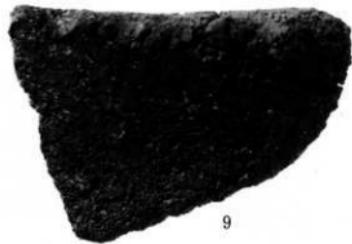
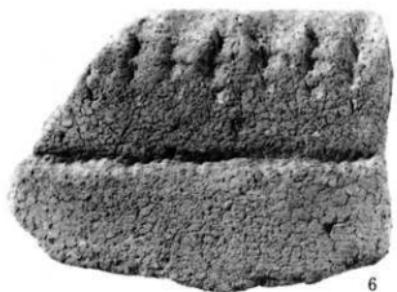
(上) 遺物出土狀況

(下) 土 層



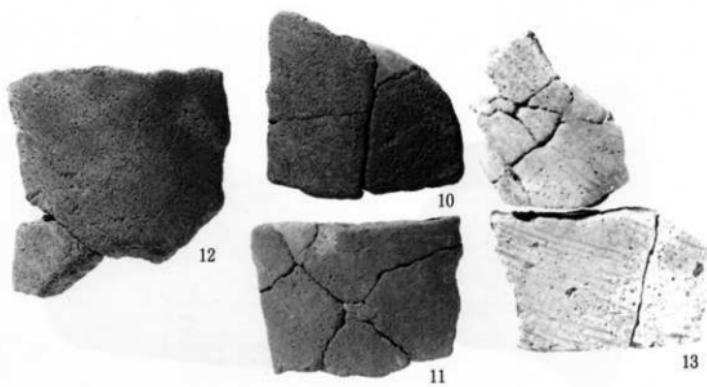
図版 3







5



10

12

11

13



16



14



15

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告(24)

県営畑地総合土地改良事業に伴う発掘調査報告書

柿 内 遺 跡
大 園 遺 跡
西 俣 遺 跡

発行日 平成11年3月31日

発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-5652 鹿児島県姶良郡姶良町平松6252

印 刷 中央印刷株式会社

〒892-0804 鹿児島市春日町12-16